

University Academic Repository

キャリア教育への一考察：
入学者支援の一環としてのオープンキャンパスの活用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古閑, 博美, コガ, ヒロミ, KOGA, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/222

キャリア教育への一考察

～入学者支援の一環としてのオープンキャンパスの活用～

A Study in Careers Education

— Incorporating 'Open Campus' Sessions into the Support Program for Freshmen —

古 閑 博 美

KOGA Hiromi

<要 約>

大学は競争時代に突入し、少子化が進むなか、ほとんどの大学がオープンキャンパスを実施するようになった。入学者をより確実に確保するため、各大学とも自学の紹介に腐心し、受験生に関心を抱いてもらうためにアイデアを絞っている。大学にとって、オープンキャンパスの活用は課題である。

本稿は、本学で実施するオープンキャンパスを、キャリア教育を視野に入れた入学前の学生支援として提案するものである。東京家政大学の例に見るように、すでに、入学前教育への取組みが実施され評価されるなど、今後、入学前教育への関心が高まるであろう。進路講演・面談、出張授業等高大連携に努める取組みのほか、単位化を模索することも必要ではないか。

オープンキャンパスで、生徒らに、将来ある学生としての内発的動機付けを試みることは、嘉悦大学が行う入学後の学生教育や指導の点から有効かつ必要であり、教職員が一丸となって取り組む実学教育の実践となるであろう。

<キーワード>

オープンキャンパス、キャリア教育、実学、入学前教育、入学者支援

はじめに

近年、産業界や教育界でキャリア¹⁾や、キャリア教育²⁾が注目されている。企業では、新卒採用と区別してキャリア採用³⁾を行ったり、社員教育にキャリアデザイン⁴⁾を導入したりしている。大学では、キャリア関連科目を正課科目として設置するところが増えている。社会的にも、キャリア教育を支援する動きが活発であるといえよう⁵⁾。キャリアを考えるには、生涯を見据えた長期的展望が必須であり、おりおりの的確な教育的関与が望ましい。

本稿では、オープンキャンパス⁶⁾の位置づけについて、キャリア教育を視野に入れた取組みの観点から考察した。過去3年間のオープンキャンパスへの参加者の推移を観察し、参加者を入学予備軍としていかに「もてなす」かについて若干提言する。それは、入学者支援の

観点から、オープンキャンパスを、経済的・精神的・行動的自立を目指す学生の育成を明確にした、入学前のキャリア教育として位置づけるものとなるであろう。

1. キャンパスライフとオープンキャンパス

キャンパスライフとは、入学から卒業までの在籍期間中におけるキャンパスでの学生の過ごし方全般のことである。キャンパスライフでは、大学は学生に必要な情報や環境を適切に提供し、学生はそれらを的確に活用することが十分な成果と考えられ、受験生にとって志望大学の決定にキャンパスライフが重視される。そのため、受験生には、学生生活に関する情報を入手する方法や機会があるのが望ましいこととなる。その一つが“オープンキャンパス”である。彼らは、オープンキャンパスを、充実したキャンパスライフを送るうえでの学生支援のあり方や教育・就職実績等を直接確認したり、キャンパスの雰囲気や教職員の人柄に触れる機会としたりするほか、他大学との比較の場としている。

オープンキャンパスは、高校生や受験生（以下、「生徒ら」という。）にとって訪問先の大学に足を踏み入れるというだけでなく、その大学ならではのキャンパスライフの一端に触れる貴重な機会として受け止められている。そこで得る情報は、キャンパスの立地条件や地域環境、授業をはじめ学友会、就職、アルバイト、学事日程などであり、ほかにも自宅通学できない生徒らには住宅情報などがある。

生徒らは、カリキュラム、授業、資格、海外研修などの学習関連情報および就職情報以外にも、学友会や正課外教育に位置づけられるボランティア、地域活動などに関心があることがある。それは、進学先の大学で自分はどのような時間を過ごし、どのように成長できるかに対する期待であるといえよう。だが、大学全入時代の今日、キャンパスライフに期待感を抱かせるのは簡単ではない。

本学のオープンキャンパスは、大学説明、模擬・体験授業、キャンパスツアー、個別相談などで構成されている。他大学のオープンキャンパスも概ね同様の内容であるため、今後、本学独自のあり方を模索する必要がある。人権、学生支援・相談等に適切に対応する大学としての周知は十分であろうか。キャンパスライフは、卒業を目指し単位を修得する学習中心に限定するのではなく、快適なキャンパスでの快適な学生生活を約すものでなければならない。それには、大学に在籍するものに保障される有形無形の特典について情報を提供する必要がある。キャンパスライフの充実には、学生ならではのキャリアをデザインするうえで必要な動機付けや、キャンパスライフの充実を目指すことが将来に直結していることなど、早い時期に理解するのが有効となる。こうした学生支援は、入学前から行うことでより効果が期待できる。

オープンキャンパスは、わが国の少子化傾向が明らかとなった80年代から実施されるようになり、またその影響は無視できないとして、今では多くの大学が学生募集の一環として

導入している⁷⁾。少子化が進むにつれ、大学は、生徒らに自学のことを知ってもらうだけでなく入学してもらわなければ経営を危うくする、との危機意識を持つようになった。大学は公共的公益的役割を担うのは変わらないが、経営は競争原理と無縁ではなく、世界中から入学者を募るなど経営努力は必然である。大学の統廃合がこれまで以上に予想されるなか、大学は、いやでも生き残りをかけて改革や改善に取り組まなければならない。大学としての認知を高め、ファン（入学予備軍）を増やすことが課題だが、その取組みは地元密着型、研究特化型などさまざまである。

本学は「志願者数増加率ランキング300大学」の91位にランクインしているとの評価があるが（『エコノミスト』2007.1.16）、しかしそれは、無論、大学としての安泰を意味するものではない。入学前から入学後、卒業後に至るまで、嘉悦大学で学ぶ（学んだ）ことには意味がある、との評価が不可欠である。

オープンキャンパスは、学内で実施する以外、学外でも実施されている⁸⁾。学外で実施するオープンキャンパスの目的として、生徒らに交通費等の負担をかけることなく開催することがある。教職員が直接的に触れ合い、進学先として選択肢に加えてもらう働きかけができる場とすることができる。本学では、卒業生が組織する光風会との連携による広報活動のほか、高校での講演会などが行われている⁹⁾。学外でのオープンキャンパスについては、今後ともさまざまな機会を捉えて、あるいはこちらから働きかけて活動することが課題といえよう。

学外でのオープンキャンパスとしては、実際のキャンパスを利用するわけではないので、適切な時期・場所・陣容で実施することで、広報活動や進学の動機づけの一助となるプログラムとしている大学が多い。と同時に、そこには、目の前の生徒らの獲得に限定しない長い目で見た広報活動の目的がある。

学内外を問わずオープンキャンパスを実施することは、社会に大学の存在を発信し続けるという、“大学の姿勢”にかかわる。本学は創立（1903年）の歴史は古くとも四年制大学の歴史は2001年度からであり、大学として対外的な広報活動をなお強力に推進する必要がある。本学のキャンパスライフが、生徒らおよび関係者に魅力的なものとして伝わるなら、それは、オープンキャンパスの目的をひとつ達成したことになるといえよう。そのためにも、本学のキャンパスライフが魅力的かどうか、あらゆる点から検証する必要がある。謙虚に見直したうえで果敢に挑戦する大学でなければならない。その意味では、このたびの自己点検自己評価への取組みはよい起点になったといえるのではあるまいか。結果を踏まえて、細微にわたって問題点を共有し、改善改良に向けて一步でも前進することが課題である。

2. 学生の実態からみたオープンキャンパスの必然性

手のかかる学生が増えた、という声は、いまや国内のどの大学からも聞こえてくる。京都

大学理学部では2003年に「少人数担任制度」を導入した。学生6～7人に1人の割合で担任がつく制度で、担任は進路や成績の相談にのり、成績表は個人面談をして手渡しする。その理由として、「大人として扱えない学生がいたからだ」とのことである¹⁰⁾。放っておいても学生は勉強し、自分で悩んで進路を決めた時代から、手取り足取りのサービスが必要な時代への移り変わりを実感している教員は少なくない。“大人として扱えない”学生の姿は、偏差値の高低に関係ないことがある。

担任制度は、本学ではアドバイザー制度としてすでに実施している。大学として、学生への“手厚いサービス”が欠かせない現実直面するなか、彼らに必要なサービスを積極的に行う教育姿勢といえる。学生サービスは、学生の実態を把握し、適切に行いたい。“きめ細かい”のはよいが、過剰なサービスは不要である。本学での“学生支援”のあり方を見直し、学生支援を在学中に限定するのではなく、入学前から卒業後まで適切な支援として充実化を図りたい。オープンキャンパスを入学前の学生支援として明確に位置づけ、オープンキャンパスでの授業に参加すれば、それを入学後の単位に反映させるなども一案である。他大学では、ガイダンスやセミナーなどの単位化が検討されるようになってきたが、オープンキャンパスでの参加について、入学後の学内インターンシップなどと組み合わせて単位化するなど検討する余地がある。

つぎに、入学前の学生支援として東京家政大学の例をあげる。

東京家政大学では、学生支援に対する取組み（「出身地域へのアウトリーチによる自立支援プランー地方の時代を支える人材育成プランー」）として「入学前より、卒業後まで1人ひとりの生き方を支える支援を行っている」。入学前の支援では、①パンフレット「大学で何を学び、卒業後どう生きるか」で生き方のモデルの提示、②入学前教育の実施、③地区懇談会での進路相談、④女性が自分の力で夢をかなえるためのThinking sheet を実施している¹¹⁾。これは「キャリアデザイン・ライフプランを明確にし自ら行動できる学生を育成」するものである。本取組みは、文部科学省の平成19年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に選定されている。

このプログラムの目的には、「学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を養成するため、各大学・短期大学・高等専門学校における、入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援プログラムのうち、学生の視点に立った独自の工夫や努力により特段の効果が期待される取組を含む優れたプログラムを選定し、広く社会に情報提供するとともに、財政支援を行うことで、各大学等における学生支援機能の充実を図ることを目的とします」とある¹²⁾。東京家政大学の取組みの選定理由には、「（前略）親子の相互理解・支援の下、学生自身が自分のキャリアデザイン、ライフプランを明確にして行動できるように支援することを基本理念としており、保護者の希望を満たしながら学生の自立支援を行うとともに（中略）地に足のついた実現性の高い取組と考えられます。特に、保護者や学生の出身地と連携しつつ、在学中の幅広い各種支援に加えて、入学前（入学前教育）から卒業後（転退職相談やリカレン

ト教育)に至るまでの長期にわたる貴学の学生支援の取組は、他の大学等のこれからの学生支援のあり方に多くの示唆を与えるものとして評価できます」とある¹³⁾。

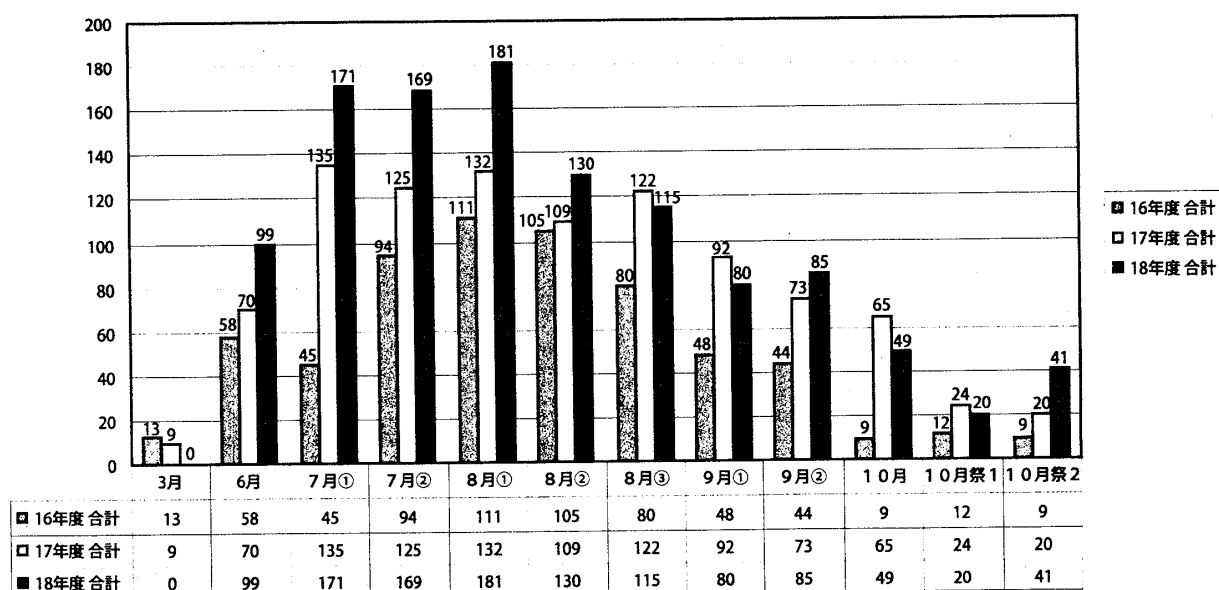
嘉悦大学は、その規模¹⁴⁾からも学生と教職員の距離が近いのが特徴といえるが、生徒らが学内に入った瞬間から違和感なく大学にとけこめるよう、挨拶したり声をかけたりするなど日ごろから教職員間および学生に対しても相互の親和的な雰囲気作りが大切である。生徒らが進学先を決定するさい、「実際に訪れて、校風や大学の雰囲気が自分に合うかどうか確かめることが、進路選びで重要となっているようだ」という分析がある¹⁵⁾。「親しみやすい」雰囲気は本学の規模からして必須といえ、“親しみやすく学びやすい”大学として生徒らにアピールすることが肝要ではなかろうか。

本学のオープンキャンパスでは、生徒らに接するさいの注意事項として、「親しみやすい」「話しやすい」「優しい」「明るい」ことが毎回あげられる。これは、生徒らの、キャンパスの「雰囲気」と、そこで働く人たちの「人柄」への関心が高いことを踏まえての要望だといえよう。

3. オープンキャンパスの参加人数の推移から

本学のオープンキャンパスに参加した生徒らの人数の推移は、図1のとおりである。過去3年間、本学を訪問する生徒らは増加している。彼らを一過性の大学訪問にとどめるのではなく、より高い率で本学への興味や関心を高め入学に到らしめるには、いっそうの努力が不可欠である。それぞれの部署担当において、学生募集や学生の教育、指導、支援等に日夜知恵を絞っているとはいえ、乾いた雑巾を絞るような努力が全学的に求められている。本学が、そうした現実直面していることは否定できないのである。

図1 オープンキャンパス参加者推移（平成16年～平成18年：父母他除く）



内藤吉了作成。

図1に見るように、生徒らが本学に足を運ぶのは6月から9月までが主で、なかでも7月と8月が山場となる。高校の進路指導は5月と7月ころに行われ、夏休みに訪問する生徒らは余裕を持って大学を比較し検討している。IT社会の申し子である彼らは、インターネットで情報を検索するのは特別なことではない。したがって、大学は、最新情報を発信する公式ホームページの内容が充実しているのはむろん、情報量の按配や匙加減に戦略を要する。

情報は、すべてを知らせるのではなく、足を運ばなければわからない情報があるのが肝要である。生徒らが、本学に興味を持った状態で学校見学やオープンキャンパスに誘導するのが肝心となる。「お徳感」「びっくり感」「意外感」など、よい意味での、期待を裏切るしかけが必要であろう。また、本学専任教職員や在学生が作成したホームページなどを通じ、本学を多面的に紹介したい。e-キャンパスを標榜する本学で、学生のホームページ作成コンテストを実施するなど、生徒らに、大学生活を具体的にイメージさせるコンテンツがあるのが望ましい。生徒らにそういった機会を提供することは、早い時期に大学に親しむことで、大学生になるためのキャリア教育の導入となるのではあるまいか。

いうまでもなく、オープンキャンパスの参加者が増加傾向を示しているからといって、すぐにそれが入学志願に結びつくわけではない。確実に入学者を増やすためには、生徒らを本学のファンにし、期待を裏切らないことおよびリピーターの生徒らを最後まで引きつけることが肝要である。高校との緊密な関係を絶やしてはならない。募集には人間関係が無視できないとはいえ、担当者の働きは大なるものがある。

生徒らは、小学生のころから三者面談に親しんでおり、高校の進路指導担当教員や父母らの意見が影響を与えることが少なくないとされる。本学でのオープンキャンパスに父母らのつきそいは増えており、そこでの情報提示は、生徒らに向けたもの以外、父母らの関心を高めたり納得させたりするものでなければならない。表1は、父母他の参加者の数の推移である。「他」とは友人などである。

個別面談では、親子の断絶や、親の言いなりで主体性のない生徒の姿を垣間見る場合がある。なかには、彼らが入学したとして、入学後のヘルスケアが必要な姿が予想されるものがある。オープンキャンパスでは、そういった、親子の相互理解の場とする取組みがあってもよいのではなかろうか。父母らの参加は、年々増加している。本学の、学生へのヘルスケアの取組みは、キャンパスライフの充実や支援のあり方のうえから広報に値するものであり、キャリアを考えるうえでは、心身の健康維持や促進への対応が不可欠だからである。ひいては、入学後の早期退学や、休学などを減らすことにもつながる。

表2 オープンキャンパス父母他推移（平成16年～平成18年）

オープンキャンパス 月別参加者数	父母他		
	16年度	17年度	18年度
3月	3	5	
6月	10	10	23
7月①	28	37	43
7月②	24	33	53
8月①	29	33	32
8月②	21	24	18
8月③	21	19	17
9月①	16	20	19
9月②	14	15	17
10月①	5	9	16
学園祭1日目	0	0	8
学園祭2日目	6	0	8
11月	2	11	14
12月	0	12	
1月	7	7	
合計	186	235	268

内藤吉了作成。

（注）空所は未実施

参加者数からは、学園祭での参加者数が課題である。学園祭は、大学を、地域をはじめ広く学外の人たちに開放する数少ない機会である。活用の機会として活かすための議論が必要ではなかろうか。そこでは、「見せる」のではなく「参加する」オープンキャンパスの企画があるのが望ましい。

4. 教育現場と問題意識

日本は高学歴社会を形成したが、社会での変革が激しいなか、教育制度に対する試行錯誤が続いている。1970年代には詰め込み教育の弊害が叫ばれ、1980年代には学習負担の適正化がいわれるなか、徐々にゆとり教育が始まり、2000年代初めには本格的な導入が行われた。今また、学習指導要項の改訂など教育的取組みのあり方が見直されようとしている。その背景には、小学校から高校まで学力低下、学級崩壊、不登校や暴力行為、メンタルヘルス不全の増加等がある。

大学とてこれらと無縁ではない。大学では、「基礎学力の低下」が問題となっている。これに関連して、学生の個人指導が思うように行えないとの悩みがある¹⁶⁾。今や、生活面から学力や体力の面に至るまで、あらゆる事柄に対し「低下」が指摘されるようになった。筆者は、若者の「心力低下」を懸念するものである。

多くの大学では、学生に対する手厚い支援や関与が行われるようになった。一方でそれは、自立心の形成を先延ばしすることにつながる結果をもたらす側面を生じさせることにもなった。それは、大学だけの責任とはいえないが、就職する年齢は、1960年代に比し3年から5年以上延び、その結果、人生設計への意識が希薄ともいえる態度が多く見受けられるようになった。これらは、生涯設計や、キャリア形成に関する長期的展望が持ちにくく、利己的な現在のことしか考えないか考えたくない学生の態度に現れている。

授業に関しては、「(教員の)7割が一方通行的に教える授業ではなく、学生が主体的に学習するような授業を望んでいる」との報告がある¹⁷⁾。また、同様に、「教える授業」から「学生が学ぶ」授業へ転換することが極めて重要である、と指摘していることには、オープンキャンパスでの模擬・体験授業への示唆がある。担当する教員にとっては、知のコンテンツを増やすきっかけにするなど、前向きにとらえたい。

エリクソンの発達段階¹⁸⁾によると、生徒らはⅧ段階に区分されるなかの「V青年期」「Ⅵ前成人期」に該当する。しかし、モラトリウムやピーターパン症候群にみるように、おとなになりたくない、もしくはおとなになるのを先延ばししたい青年、自分の判断に自信が持てない若者が増え、キャリア形成を自ら意識する学生が減るような構図があるなか、いかに刺激を与えるかが課題である。つぎは、筆者が担当した「キャリアデザインⅢ」の受講生のレポート(ママ)の一部である¹⁹⁾。本講座では、初回に2年生の就職活動体験を聞く場を設置している。

先輩方の話を聞いて、自分のためになることが沢山あった。この前入学したばかりなのに、もう将来のことを考えなければいけない時期なんだと実感した。

先輩方は、インターンシップは参加したほうがよいと話していた。企業の方の話を聞けるなど、インターンシップの大切さがわかった。インターンシップに参加するか迷っていたけれど、先輩方の話を聞いて、参加しようと思った。将来どうゆう方向の職種に就きたいのかまだ決めていないので、インターンシップを通して自分に合っている職業を見つけたいと思った。また先輩の中で、バイトを2個かけもちしていたのに、どちらも辞めて就職のためにけじめをつけたという話を聞いて、かっこいいと思ったし、この企業だ！！と思える企業に自分も出会いたいと思った。

就職活動なんてまだまだ先のことだと思っていたけれど、今日先輩方の話を聞いて、就職活動はもう始まっているんだということに気づけてよかった。もっと先輩方の話を聞きたいと思った。このキャリアデザインⅢを通して、今まで気づかなかった新しい自分を見つけたと思った。

若者のなかには、些細な理由で一度決断したことを変更したり、友達というだけでその話に流されたりするなど、安易で気まぐれな行動のほかブランド志向が強い点などが見られる。筆者の観察でも、この数年、オープンキャンパスに友達同士で参加したり、父母ら、とくに母親と参加したりする生徒らは増えている。時代の様変わりを肌で感じさせられること

であり、表1からも、それは実証されよう。

そうしたことから、オープンキャンパスは、若者気質を踏まえたうえで、父母らの関心をも引きつけなければならない場となってきたといえる。このことは、今後のオープンキャンパスの企画運営のあり方にも影響を与えるものである。受験する生徒ら以外、家族等関係者の視点や満足感などが、これまで以上に大学進学のための考慮の対象となっているといえる。

紹介したレポートにみるように、学生は先輩の言葉や意見を身近なものとして捉える傾向が強い。その意味で、オープンキャンパスには在学生在が積極的に関与するのが望ましいこととなる。生徒らに年齢の近い在学生在が活躍することは、本学の学生の、自立した姿を生徒らに印象付けることであり、これまでも本学のオープンキャンパスの参加者に好評である。教育的見地からは、在在学生を、入学予備軍である生徒らのメンター²⁰⁾として育成することができる。彼らを、“メンター”に位置づけ、オープンキャンパスを、学生教育の場として活用することは、学内インターンシップとしても有効な取組みとなる。

5. オープンキャンパスでの講義（模擬・体験授業）

今や、多くの大学では、大学紹介として構内を案内するキャンパスツアーのほか、オープンキャンパスを食堂体験、講義体験の場として設置し、生徒らに大学を知ってもらい進学先として検討してもらうような企画を工夫している。メディアが、オープンキャンパスを含めた大学教育や、そこでの取組みを取り上げる回数は増えている。近年、学食の味やトイレ環境など、従来、二次的要素とされていた事柄だが、生徒らの大学選択の要因として無視できないものとなっている。大学の魅力は、学問以外のキャンパスの自然や人工的環境など、多様な観点から求められているといえる。

それは、社会が豊かになったこと、大学がレジャーランド化したといわれるようになったことなどと無関係ではない。その一方、大学の「脱レジャーランド化」が始まっている、との指摘がある。『私立大学学生生活白書2007』（日本私立大学連盟）によると、「学生が積極的・意欲的に正課教育に取り組む傾向が継続されている」とある。個室が与えられ、室内の冷暖房は当たり前という環境で成長した学生がほとんどの現状では、キャンパスの施設環境の充実と整備というまでもないことになり、今後、学問分野において、すなわち研究業績が生徒らの関心を引くことが必至となる。研究と教育というが、大学人に課せられるハードルは、研鑽と評価を繰り返し、適正性をともなうなかで設定されていくことになるであろう。

大学進学を希望する生徒らの関心を引く、とは「キャンパスライフの魅力を総合的に伝える」ことに関連する。これは、生徒らに迎合するのではなく、まず大学を、文字通り“入口”から観察するだけでなく、中に入り込んでより多くを知ってもらうための工夫としなければならない。小規模大学として本学では何ができるか、不断の模索が必須である。

大学が提示すべきことは、教授陣の研究、学生への教育であることは言を待たない。そこに、学生支援に長じた職員が加わり、全学教職員が一体となって学生の教育に取り組むことが就職や大学院進学など出口の成果として表れるのではなかろうか。

つぎに、過去3年間のオープンキャンパスでの模擬授業をあげる。科目を見る生徒らは、大学での授業に期待をふくらませ、中心的科目を見て取るなどして、大学の特徴をつかむ一助としているといえよう。

(1) 2004年(平成16年)体験授業「学部とテーマ」

1) 経営経済学部

- ①「ケーキ」ってなに? ～まんがよりわかる経済入門
- ②40分で英語の達人!? ～英語のコツ教えます
- ③これであなかもパソコン博士 ～見れば分かるパソコンの仕組み
- ④踊る!? フランス語&英会話～2ヶ国語での自己紹介が学べる
- ⑤夢と魔法の王国への招待 ～巨大パーク演出の秘密
- ⑥無から有を創造する ～銀行のしくみ
- ⑦誰でもコミュニケーションが出来る! ～ Talking with Simon
- ⑧円高でハワイへ行こう! ～外国為替相場の不思議
- ⑨超楽しい中国語入門 ～中国語の基礎をゲーム感覚で学ぶ
- ⑩欲しい情報がどんどん手に入る ～インターネット検索の秘技
- ⑪学校給食は一食いくら? ～公共政策とコスト
- ⑫競争だ! ファーストフードショップ!!! ～お店の場所には訳がある
- ⑬家の資産管理・設計のしくみ ～FP(ファイナンシャルプランナー)のお仕事
- ⑭経営・経済ってどんな感じ? ～身近な話題から経営・経済を感じてみよう!
- ⑮踊る!? 英会話 ～英語で自己紹介!!
- ⑯自然の値段はいくら? ～イギリスの薔薇とケニアの湖の関係
- ⑰超楽しい中国語入門 ～中国語の基礎をゲーム感覚で学ぶ

2) 短期大学部

- ①魅力行動学～身の回り30cmからはじめましょう!(保護者向け)
- ②心理学はじめの一步 ～人の性格と血液型
- ③魅力ある日本人 ～魅力行動を模索する

(2) 2005年(平成17年)体験授業「学部とテーマ」

1) 経営経済学部

- ①パンダもわかる経済学入門～ケーキってななに?(政府のホームページから探る)
- ②はじめての経営・経済入門～身近な話題から経営・経済を感じてみよう!
- ③家の資産管理・設計のしくみ～FP(ファイナンシャルプランナー)のお仕事
- ④パンダの体調と血圧～お金の話

- ⑤なぜ、このお茶買ったんだろう？ ～お茶ドリンク市場をめぐる戦い
- ⑥ファーストフードでもうかっている会社はどこ？ ～会計数値で行う会社の健康診断
- ⑦パンダの大きさと成長 ～ GDP の話
- ⑧インターネット「超」検索法 ～一歩進んだ検索テクニックでインターネットの広さと深さを学ぶ
- ⑨パソコンを楽しく使うワザ ～嘉悦ではパソコンでこんなこともやっています
- ⑩会社は誰のもの ～社長は会社で一番偉いのか？
- ⑪多数決じゃ決められない！？ ～コーヒーと紅茶とジュース、どれを飲めばいいか？
- ⑫多数決じゃ決められない！？ ～和食と洋食と中華、どれを食べればいいか？
- ⑬学校給食は一食いくら？ ～公共政策とコスト
- ⑭イングリッシュコミュニケーション ～ "What is it like?" - Getting to know you...
- ⑮言えると聞こえる英語のツボ ～楽しい英語の発音方法

2) 短期大学部

- ①魅力行動学 ～自分の魅力をさがそう
- ②医療事務の仕事って？？ ～初めて知る医療事務

(3) 2006年（平成18年）体験授業「学部とテーマ」

1) 経営経済学部

- ①経済学入門 ～日本経済は病気にかかった北島康介である
- ②おいしい学校給食の条件はなに？ ～あなたの体験の政策分析入門
- ③はじめての経営・経済入門 ～身近な話題から経営・経済を感じてみよう！
- ④自然のねだんはいくら？ ～私たちのくらしの向こう側
- ⑤所得税の特徴について ～お金の儲け方とは？
- ⑥会社を作ろう！！ ～会社法の誕生で1円で会社が作れる
- ⑦イングリッシュコミュニケーション～ Everyone Can Communicate
- ⑧これであなたも経営者の仲間入り！ ～知っておくと得をする損益分岐点分析
- ⑨コンピュータで何ができる？ ～ITの仕組みと活用方法を紹介～
- ⑩多数決じゃ決められない！？ ～和食と洋食と中華、どれを食べればいいか？
- ⑪心、身体、ことば ～振り返ると言葉がついてくる
- ⑫パンダタイムマシーンに乗る ～経済のはじまりを見に行く
- ⑬法律家ってどんな人？ ～テレビ・新聞では教えてくれないこと
- ⑭競争と協創 ～トヨタとGMのくるまづくり
- ⑮乗り物のバリアフリーって意外と困難 ～まちづくりの政策学入門
- ⑯学生とともにつくる商店街 ～高知市、広島市の事例を中心に
- ⑰自然のねだんはいくら？ ～私たちのくらしの向こう側
- ⑱パンダ海外旅行に行く ～円高・円安を考える～

2) 短期大学部

- ①医療事務の仕事って?? ～初めて知る医療事務
- ②医療事務の仕事って?? ～初めて知る医療事務
- ③医療事務の仕事って?? ～初めて知る医療事務
- ④医療事務の仕事って?? ～初めて知る医療事務
- ⑤魅力行動 ～若いって素晴らしい

これらのなかには、生徒らが興味を持つ科目ないし学部顔となる科目として、タイトル等新たに設置したものがある。経営経済学部は「経済」「経営」「語学」「法律」「コンピュータ」関連、そして短期大学部は「魅力行動」「資格」「心理」関連の模擬授業が行われている。今後、「キャリア」「コミュニケーション」「ホスピタリティ」などを紹介したい。それは、本学の教育の専門性ととも、実学的研究の幅広さを示すものとなるであろう。

本学の教員は、職責としてアドバイザー業務などの学生指導を含め、教育と研究の成果を発表したり提供したりすることが求められている。加えて、「貢献」の取組みを考えたい。それは、大学人として学生や社会に貢献することであり、大学人の義務といってよいものである。教授陣は、オープンキャンパスの模擬授業には、大学教育の一端を生徒らに示す機会と認識したうえで協力するのが望ましいこととなる。日本の未来を背負う生徒らに、嘉悦大学でのオープンキャンパスに参加したことが貴重な体験であったと記憶してもらえらるなら、それは、教育に携わる者にとって有意義な時間といえる。

オープンキャンパスは、生徒らに開かれた大学紹介の場というだけでなく、教職員にとって企画力や教育力を問われる場となっている。専任教員は、オープンキャンパスで、授業や個別面談などを行うことで参加した生徒らに大学への関心を抱かせることができる。たとえば、オープンキャンパスに参加した生徒らが入学しなくとも、出身校などに口コミで嘉悦大学の取組みの面白さやまじめさが伝わるはずである。また、こうした取組みは、FDの取組みにも知のコンテンツの充実の面から期待できるであろう。

今や、多くの大学がオープンキャンパスを実施している。東京家政大学の例に見るように、学生支援としての入学前教育は大学教育の一翼を担うものとして進展する可能性がある。「創造的実学」を標榜する本学として、オープンキャンパスをキャリア教育への導入とするのは無理がないといえよう。少子化などの諸条件を踏まえると、本学への劇的な入学者増は望めないことになる。入学者を減らさないことがどの大学にとっても課題である。大学の二極化はますます進むといわれる²¹⁾。自明だが、大学は学生あつての教育機関である。講義の魅力、教職員や在学生の指導力や人間味を伝える絶好の機会となるオープンキャンパスの重要性を認識し、そうした意識を学内で共有する必要がある。教職員間の温度差をできるだけ縮めたい。

多くの大学がオープンキャンパスに積極的に取り組む傾向が強まるなか、入学後、無目的な生活を送る学生をなくすためにも、キャリア教育の視点を導入したい。

6. オープンキャンパスから始めるキャリア教育

短期大学部所属の筆者は、創造的実学の目的として、キャリア教育を、「自分を知る」「人を知る」「組織・団体を知る」「社会を知る」ことを軸に、人の話を聞いて理解したり他に配慮したりできる力、および仕事と取り組む姿勢を持つ学生の養成を目指すものである。入学後、学生の表情と態度、言葉遣いに成長のあとが見られれば、百聞は一見に如かず、であり、それは、本学での教育の成果といえ、本学への信頼が増すことになるであろう。大学は学問知のほか、世間知（社会知）、経験知を学ぶ機会を提供するところであり、授業や学友会・学外活動等を通し、学生の知的活動をあらゆる面で支援し、魅力人材²²⁾として育成したい。

また、これまでも提唱してきたが、学内では「キャンパス・ホスピタリティ」を追究し実践したい。そこには、「大学が学生をもてなす」という学生支援プログラムが必要なほか、「学生がキャンパスの快適化に参加する」ことが大切である。学生支援として「大学が学生をもてなす」ことは、学生のキャンパスライフを充実させ満足度を上げる試みと努力を惜しまないことを意味し、学生に安易に迎合するものではない。

大学は、教育期間の年限があるなか、短期・中期・長期の観点から学生教育を行う。そこには、教育理念・目標・方針・方法などがある。本学は、創立理念からして、学生が実学の精神を身につけ、社会で発揮することが期待されているといえよう。大学が学生を「もてなす」ことには、企業が利益や信用を得るために顧客満足に知恵を絞るのに一部通じるものがあるのではなかろうか。近年、多くの大学が授業アンケートを実施するなど学生満足を企図する取り組みを行うようになった。その結果がすべてというわけではなく、教育的見地から行う指導に、一時的に学生が不満を訴えることがあることを承知しなければならない。

学生は、卒業単位を満たさなければ、就学年数を満たしていても卒業延期となる。学生であっても、規則を遵守したり他人に配慮したりするなどの行為は社会規範の範疇である。学生は、大学生活を通じて、社会への適応力を高めたり国際社会の一員としての認識を深めたり、情報社会で生きていく術を身につけていく。

しかし、大学生といえども基本的生活習慣が身につけていなかったり忍耐力や社会性が欠如していたり、社会に適応できるかどうか疑問な学生がいることも事実である。授業中の私語や飲食、着帽、携帯電話の使用など、学業の場にふさわしいとはいえない態度については言い尽くされた感さえある。学生のあまりの態度の悪さに注意するのを諦める教師や教壇を去る教師がいる。

学生には学生ならではのさまざまな特権がある。彼らは、将来ある社会人である。しかし、今の学生は、自分が社会的に優遇されていることを自覚しているであろうか。こうした基本的なことから、時や場合にふさわしい振る舞いや言葉遣いなどができるよう、具体的かつ懇切丁寧に教授しなければならない。大学でも、授業以前の、学生の態度等に関する指導が必要な現在、生徒らが大学に足を踏み入れる機会は、大学生としての自分をイメージさせる機会とするのが肝要ではなかろうか。

入学直後のガイダンスや1年次教育が注目されている背景に、学力低下などのほか大学生としての自覚のないまま学生生活を送る学生が増えていることがあげられる。筆者の行ったアドバイジへの聞き取り調査や学生のレポートからは（短期大学部1年。2006）、つぎのことが指摘できる。

- ① 1年次生は、高校生ではないがおとなでもない、など宙ぶらりんの意識でいる。
- ② 「大学生としての自覚をいつごろ持ったか」と質問すると、大部分の学生が「1年の秋学期以降」と答えている。
- ③ 単に、「自分はもう高校生ではない」というだけで、大学生としての自覚があるわけではない。
- ④ 髪を黒くしたくないから、という理由でインターンシップに行かない学生がいる。

近年、カリキュラムを組むにも一人ではできない学生が増えている。このことは、学内の多くの教員が指摘している。だからといって、学生を手取り足取り指導するのではなく、学生の自立と自律を促すための取組みとしての教育的指導や、導入的指導としてのキャリア教育があるのが望ましい。

「大学生としてどう振る舞うか」ということは、大学生のキャリアの第一歩となる。それは、学生の、経済的・精神的・行動的自立への手掛かりとなる教育実践としてのキャリア教育である。昨今の学生の生態を表面的に捉えるのではなく、複合的見地から学習環境等を提供することは、教育上、彼らの成長を促すことになるであろう。

キャリア教育に内発的動機付けが必要なのは、社会では不断の努力が求められていること、生きがいや仕事のやりがいを見つけ人生を充実させるのが大切であり、そこに自己を投影させることで成長が望めるからである。オープンキャンパスで、生徒らに、将来ある学生としての内発的動機付けを試みることは、嘉悦大学が行う入学後の学生教育や指導の点から有効かつ必要であり、教職員が一丸となって取り組む実学教育の実践となるであろう。入学後、早い時期に嘉悦大学のキャンパスを闊歩する自己のイメージをもたらすオープンキャンパスでの体験が望ましい。

しかし、その有効性については今後、追跡調査が必要である。

おわりに

嘉悦大学は、創立の理念である、実社会に役立つ実務能力を持った学生の育成に専念する小規模大学である。実務能力と、誠実さや堅実さを兼ね備えた魅力人材として学生を社会に輩出することを目指したい。

入試の多様化が進み、少子化に歯止めがかからない今日、大学の大衆化は一層進み、キャンパスの学生は多様化している。在職し、日々、学生を真摯に見つめるなか、自ずと見えてくるものがある。キャンパスを活性化するには、学生、教授陣、スタッフが三位一体となっ

た取組みが欠かせない。大学教育の取組みや、学生指導等は、誰かが変えてくれるのを待つ時代ではなく、自ら変えていく取組みが必須である。そうでなくては、教育の使命を達成することはできないであろう。このような状況のもと、オープンキャンパスに対しても、教職員一人ひとりの意識や考え方は必然的に変わらざるをえないことになる。オープンキャンパスは、生徒らの進路決定の上位にあり、入学前のキャリア教育に位置づけた企画と内容の重要性が増している。

大学生のキャリアは大学入学後から始まるのではなく、オープンキャンパスを主体的に活用することから始まるとすれば、生徒らの関心は高まるのではなかろうか。本稿で、東京家政大学の入学前教育の取組みを紹介したが、キャリアの視点での取組みは始まっている。オープンキャンパスへの父母らの参加が増えており、本学で何を学び、何を得るかなど親子で関心が深いことがわかった。キャリアをデザインする力を育成することは、高校生から大学生へのスムーズな移行を助けることになる。

学生のキャリア教育を推進するうえで、多様化する人生設計や生涯学習に対応する教育体制を早くから設定することが必要である。今後、年齢や国籍、職歴などの多様な受験生を受け入れるうえにおいて、オープンキャンパスの重要性が増す。オープンキャンパスは、生徒らが直接大学に足を運ぶ貴重な機会であり、キャリア教育に位置づける取組みへの議論が高まることを期待したい。オープンキャンパスに参加した生徒らおよび入学者へのアンケートを実施するなど、今後とも研究を進めたい。

注

- 1) キャリア (career) は、辞書に「(一生の) 経歴、生涯、履歴」のほか、「生活手段 (生涯の、または専門的な)」「(職業上の) 成功、出世」などとある (広辞苑第五版)。シャイン (Schein, E. H.) やスーパー (Super. D.) らの先行研究を踏まえ、「キャリア」は、今日では「生涯にわたる人間の生き方やライフスタイル」など、幅広い意味で捉えられている。金井壽宏は「成人になってフルタイムで働き始めて以降、生活ないし人生全体を基盤にして繰り広げられる長期的な仕事生活における具体的な職務・職種・職能での諸経験の連続と節目での選択が生み出していく回顧的意味づけと将来構想・展望のパターン」と定義している (p.141)。
- 2) 1971年、米国のマーランド教育局長官が「キャリア・エデュケーション」の導入を最初に提唱した。背景には、学力低下が問題となり、キャリア形成支援の教育が重視されるようになったことがある。
- 3) 職務を遂行するうえで必要なノウハウ、技術力等を持ち、職場経験を積んだ人材の採用であり、職場環境にすぐに適応できる能力が求められる。
- 4) 職業的発達を志向し、自己イメージを高めながら生涯にわたって自己成長を遂げるための創造的・建設的取組みのこと。
- 5) 厚生労働省が推進する YES・プログラム (= Youth Employability Support Program) がある。YES・プログラムの展開に先立って、若年者の就職能力に関する企業実態調査を行った結果、「コミュニケーション能力」「職業人意識」「基礎学力」「ビジネスマナー」「資格取得」の5項目を「就職基礎能力」とした。http://www.mhlw.go.jp/general/seido/syokunou/yes/ 2007/09/23 検索。

ほかに、経済産業省経済産業政策局長の私的研究会として、社会人基礎力に関する研究会などが提案する「社会人基礎力」などがある。同研究会では、社会人基礎力を構成する主要能力として「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の3つの要素を特定している。<http://www.meti.go.jp/press/200602080001/200602080001.html>・29k 2007/09/23 検索。

- 6) 学校説明会。学生募集のための企画運営を行うためキャンパスを開放することで、大学および学事の紹介や模擬授業、キャンパスツアーなどが実施される。「オープンキャンパス」は、学園祭やホームカミングデイなど、一般の人びとや同窓生などに大学を開放するのとは別に使われている。
- 7) 「志望校選び 学校説明会決め手に 大学・短大側も工夫こらす」『読売新聞』2007年8月17日。東進ハイスクール湘南台東口校の配布したチラシ（2007秋）によると、「高2生のための志望大学見学ツアー 参加無料」がある。予備校が、オープンキャンパス以外の大学案内の機会を独自に設定しているものである。大学は、早稲田大学、慶應義塾大学、東京大学、東京理科大学、上智大学などで、人気度の高い大学というだけでなく自由にキャンパスに入れる大学が選定されている。
- 8) 日本女子大学は、「日本女子大学フェア in 福岡」と銘打ち、電気ビル本館で、第1部 学長の講演、第2部 「ミニ講義」「入学相談会」などを実施し、紹介パネルやビデオを放映している。終了後は、同窓会会員との懇親会が開催されている（「桜楓新報 第654号」社団法人日本女子大学教育文化振興桜楓会、2007年9月10日）。
- 9) 平成20年2月8日、都立保谷高等学校の生徒及び教職員・保護者を対象にして、「生き方について」の演題で生井良一教授が講演を行った。この講演会は、保谷高校生徒の進路指導の一環として実施した。
- 10) 『Asahi Shimbun Weekly AERA '08.3.17』 p.31～32
- 11) 『平成19年度 大学教育改革プログラム合同フォーラム1 基調講演・パネルディスカッション・分科会平成20年2月9日・10日パシフィコ横浜 会議センター 1F～5F』主催 文部科学省／財団法人文教協会、p.71。
- 12) 同上。p.13。
- 13) 同上。p.70。
- 14) 嘉悦大学は、校地面積:26,950㎡、校舎面積:13,784㎡、専任教員数:48名、専任職員数:37名、の小規模大学である。学部ごとの教員、職員数はつぎの通りである。経営経済学部:専任教員37名・専任職員数29名、短期大学部:専任教員11名・専任職員数8名、である。学校基本調査（平成19年5月1日）による。
- 15) 高校生が受験する大学や短大を決めるさい、オープンキャンパスの影響力が大きくなっていることが、「リクルート」の調査でわかった。2007年3月に卒業した高校生を対象にした調査によると、「第一志望の学校を決めた時期に影響のあった情報源」は、1位「オープンキャンパス」、2位「学校案内やパンフレット」、3位「高校の先生からの情報やアドバイス」であった（『読売新聞』2007年8月17日）。
- 16) 「平成13年度 私立大学教育による情報機器を利用した授業改善に関する調査の報告」平成14年5月 社団法人私立大学情報教育協会 p.1
- 17) 前掲書。P.3
- 18) エリクソン（E. H. Ericson. 1902～1994）のライフ・サイクル理論によると、受験生らは、「V 青年期（思春期:13歳～22歳ごろ）－自我同一性（アイデンティティ）の確立・アイデンティティの拡散／帰属集団への忠誠心や社会への帰属感、VI 成人期初期（22歳～40歳ごろ）－親密性・

孤立／幸福感を感じる愛の獲得と実感」の段階に重なる。

- 19) 2006年度1年次秋学期開講科目。第1回目の授業では先輩の就職活動報告を聞く機会を設けている。「短期大学部2年生の就職活動を拝聴して」と題したレポートの提出を義務付けている。開講以来、毎年実施。
- 20) メンター (mentor: 支援を行う人) の定義として、「それぞれの専門知識を持ったビジネスメンター、メディカルメンター、教育メンター、心理メンター等が各専門分野においてメンティー (men tee: 支援を受ける人) の『課題達成と意欲促進』を支援することにより、メンティーの成長を促し成功を導く人」がある (NPO 法人国際メンターシップ協会)。古閑は、入学予備軍である生徒らを支援する学生を「スチューデントメンター」として位置づけることを提案する。
- 21) 高校生の大学入試出願数は、「1校」が4割近くを占める一方で「5校以上」も2割を超え、二極化していることがリクルートの調査で分かった。推薦やAOといった「青田買い」入試が増える一方、私立大学のセンター試験利用入試の拡大などで受験機会が増えたことによるとみている『朝日新聞』2007年10月22日。
- 22) 魅力人材として、古閑は「責任感や倫理観がある。コミュニケーション能力と豊かな感性がある。想像力があり、相手をおもんばかりの能力がある。敬意表現を適切に発揮できる」などをあげている (高良和武監修 p.163-181)。

参考文献 (本文中以外のもの)

- E.H. エリクソン／村瀬孝雄・近藤邦夫訳 (1989) 『ライフサイクル、その完結』 みすず書房
- 梅澤正 (2007) 『大学におけるキャリア教育のこれから』 学文社
- 金井壽宏 (2002) 『働くひとのためのキャリア・デザイン』 PHP 新書
- 古閑博美 (2003) 『ホスピタリティ概論』 学文社
- 古閑博美 (2005) 『FYS 講座 大学を学ぼう・大学で学ぼう』 学文社
- 古閑博美 (2007) 「魅力人材の育成とインターンシップ」『嘉悦大学研究論集 通巻90号』 嘉悦大学
- ジーニアス英和辞典第三版
- 高良和武監修 (2007) 『インターンシップとキャリアー産学連携教育の実証的研究ー』 学文社